

山形県沿岸域におけるキアンコウの成長

大澤 正・鈴木裕之（山形県水産試験場）

キアンコウ（以下アンコウという。）は農林統計の対象魚種となっていないため、過去の漁獲の動向について推察することが出来ないが、1990年代になってから漁獲量が増加しており、特に底びき網漁業にとっては重要な魚種となっている。将来の資源動向を把握するため、アンコウを含めた底魚の初期発生量調査（2004年～）を実施しており、その中で得られた資料等から0歳魚を中心とした成長について推定した。

材料及び方法

材料は2004年から2006年までに初期発生量調査及び各種底びき網調査で採取されたアンコウを使用し、体長、体重、雌雄等を測定した。なお、ここでの体長は下顎から尾びれ基底部までとした。漁獲統計は、山形県漁業協同組合の属地統計を用いた。

結果

1. 山形県漁協のアンコウに関する統計は、1991年からまとめられており、増減はあるもののおよそ100トン前後、生産金額については1994年に1億円を超えたものの、その後は7千万円から5千万円の間で推移している。
2. 図1に試験操業で採取されたアンコウの体長組成を示した。
3. これまでの調査結果では、その年発生したと見られる着底稚魚は5月中旬から6月の初旬にかけて採取され始め、9月にはおよそ11cmまでに成長する。その後12月から翌年1月にかけておよそ16cmから17cmまでに成長し、5月には20cm前後に達する。
4. 2006年5月の体長組成を見ると、3群が認められ、5～7cmが0歳魚、15～26cmが1歳魚、27～40cmが2歳魚と推定される。水揚げ対象となる大きさは体重500gからであり、体長に換算すると27cmとなり、2歳魚と推定される。
5. 漁獲対象として完全加入するのは2歳魚からと考えられるものの、成長の良い個体であれば1歳魚から漁獲の対象となると思われる。
6. アンコウはマガレイやマダラと同様に、産卵のため浅所に接岸すると考えられており、産卵盛期を推定するため、遊佐町吹浦沖の水深60m付近で操業している張網（底建網）で漁獲されるアンコウの状況を図2に示した。1月初旬から漁獲され始め、その後6月初旬まで続いている。ただ、2007年と2006年の漁獲状況を見ても漁獲の集中する時期の類似点は見いだせなかった。
7. 産卵は1月から始まるであろうことは推定できるが、その盛期については不明であった。

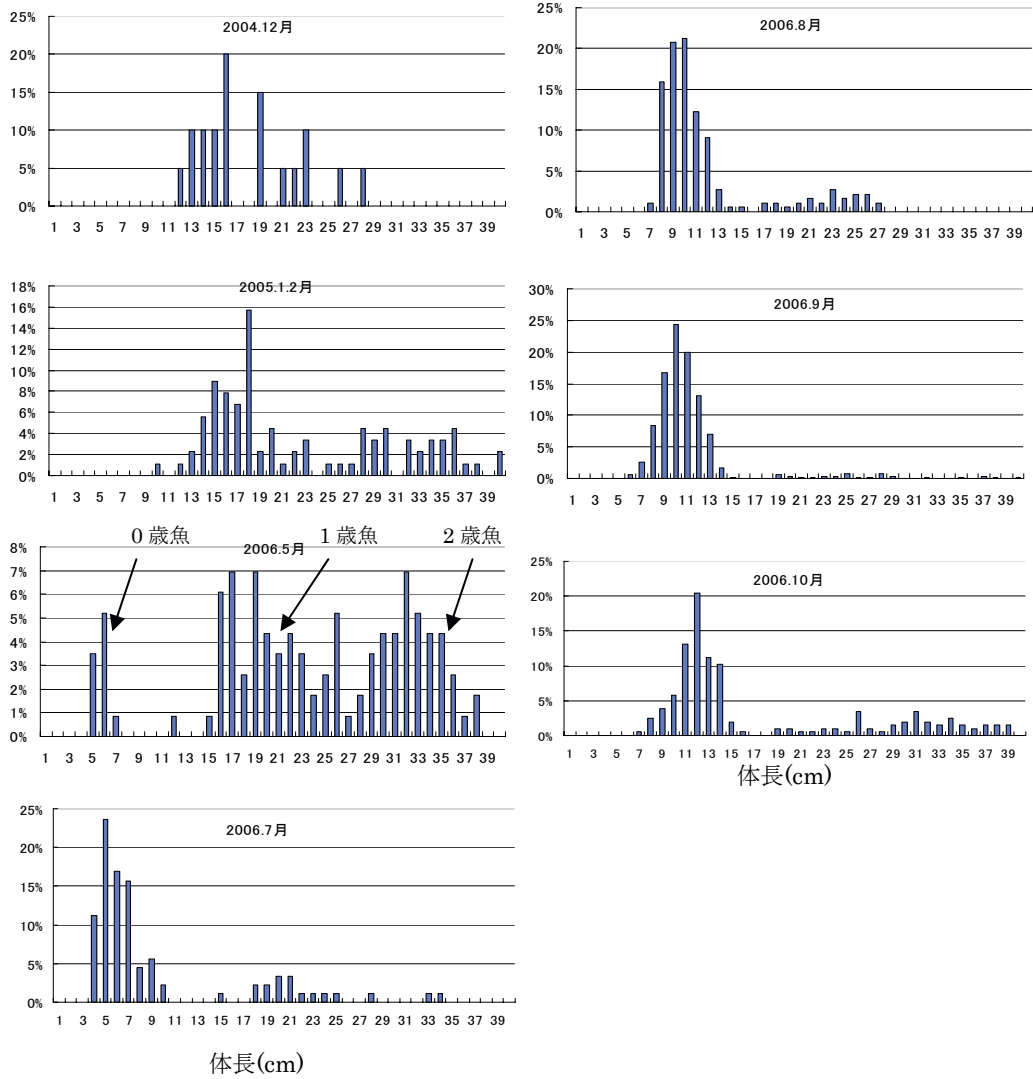


図1 試験操業で採取されたアンコウの体長組成

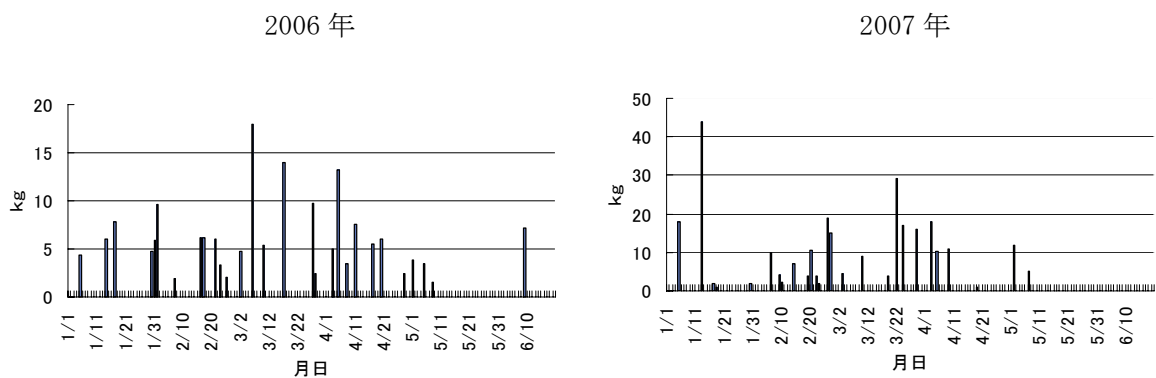


図2 張網での漁獲状況